

# 知の探求者たち



稲賀繁美・副所長ら共同研究より

国際日本文化研究センター(日文研)が、取り組んできた研究は、30年前の設立当初から「国際性」「学際性」「総合性」がうたわれてきた。それを主に実践してきたのが、センター内外の研究者による共同研究だ。時には意外性のある題を掲げ、時事問題に切り込む時も。今回は、日文研副所長でもある稲賀繁美教授が取り組んできたテーマ「海賊史観」から、「研究の今と未来」を考えた。【岸桂子】

## 「海賊史観」という視点



稲賀繁美教授

### 良識なき現代の鍵に

だ。厚さ4・5センチ、ずっしりした重さは手に取るだけでおなかいっぱいになりそうだ。一方で、人気映画などポップカルチャーを

め込んでいくことへの疑問でし「た」。東日本大震災以降、その傾向はますます強くなった。また、ネット社会の進化によるさまざまな問題も顕著になった。特に知的財産、著作権にからむ問題は、従来の法的規制では対応できなくなった。さまざまな研究領域やメディアで「海賊」という言葉が目立ってきた。

を忌避してきた緊急な課題に、臆さず照明を当てよう」と本研究の意義を位置づけた。共同研究会には70人以上が参加。本書に収められたのはその一部、36人の論考だが、20代の大学院生から70代の学者まで幅広い。

想起させる「海賊」という題名とのギャップに興味を覚える。「海賊史観」とは何か。稲賀さんは本書で「違法行為、反社会逸脱として一方的に断罪されてきた営為」を、狭義の美術史、文化史、交易史のみならず、経済史、国際法、情報流通論などの分野の知見をも学際的に取り入れ、考えた方針と位置づける。

「社会の矛盾が拡大し、あちこちで破壊の兆候を示している」という実感を込めました」と稲賀さん。だから「専門各分野の知見と美証的な探索に基礎を置きつつも、昨今の人文社会科学界が(略)正面から取り組むこと

ル」な海賊論はもちろん、「インターネット時代の知的財産権と海賊行為」と題した章も。インターネットのファイル交換ソ

稲賀さんは今年3月、編著『海賊史観からみた世界史の再構築』(思文閣出版・1万5120円)『写真』を出した。日文研でリーダーを務めた共同研究会(2013〜16年度)の成果報告と、科学研究費補助金を受けた研究「海賊史観から交易を検討する」の成果報告を兼ねた一冊

東西の比較美術史が専門の稲賀さんに、この言葉が明確に浮かびあがったのは21世紀に入ってから。「右肩上がりの経済成長は過去の遺物となり、日本の社会や文化が『軌道修正』を必要としているのに、頼みかたを決

#### 『日本研究』

日文研が刊行する学術誌。日文研以外に属する識者も寄稿している。最新刊55号(今年5月刊)のテーマは、創立30周年に合わせて「日本研究の過去・現在・未来」。10人の序文・論文によって、日文研が直面している課題が示された。一例が「日本」「アジア」の再定義であり(落合恵美子氏)、ポップカルチャーを取り巻く環境の変化などである(谷川建司氏)。興味深いのは、日文研の設立構想が明らかになった後、歴史学関係の学会などから起きた設立反対の動きを振り返る鼎談だ。疑問を呈する側にいた参加者の言葉から、「日本文化を論じる難しさ」が浮かび上がる。そして、設立後に信頼を得ていく過程も示される。現代だけでなく、過去も振り返ることの重要性がわかる。

## 交易やネット、知財 院生～70代が論考

フトによって公的機関の機密情報や個人の写真や動画、録画したテレビ番組などがネット上に散らばった「ウィニ二一事件」や、世界的に広がる日本の漫画の海賊版をめぐる国家間の攻防などが取り上げられている。

もっとも「海賊行為を反社会的行為として分析すること」を目的としたわけではない。抑え込むだけでは、現代に広がる不安は解消しがたい」と厳しく指摘する。「はっきりとした規則のない社会で、最低限の秩序を築くにはどうすべきか。トランプ現象をみるまでもなく、『従来の良識』がもはや過去のものという烙印を押されたのは明白です」

稲賀さんは日文研の今後にも危機感を抱く。学術誌『日本研究』(II)では、「社会的ニーズ」があり「実践的」な「職業教育」を優先する行政の動向に触れ、「国際的な視野に立つ『日本研究』を存続する意義そのものが否定されかねない趨勢」と言及した。そして、日文研の「海賊性」をこう説いてくれた。

「日文研は、特定の学会の利益代表ではなく、右顧左眄もしない。どっちつかずはきわめて不安定で、双方からうさんくさい、いかがわしいとも非難されます。だが、『はずれもの』を許さない潔癖な社会こそ危ういのではないでしょうか」